

# 原大演師の里親活動について

花 田 順 信  
(佛教大学教授)

## はじめに

京都には自然発生的集団里親として、古くからいわば伝統的に、土地の風習として多数の里子が預けられていた村落がある。その一つは洛北の里子であり、もう一つは洛南の里子である。

洛北里親集落はわが国における里子村の地といわれ、千年以上の歴史と伝統をもっている。京都市の北部、旧岩倉村を中心とした上加茂、修学院、松ヶ崎、八瀬、大原、静市野など数ヶ村を含み、古くから洛北里子とよばれていた。しかし、明治以降漸次衰退して、とくに戦後、児童福祉法施行後里親登録者は皆無に等しく、その形を留めなく

なった。

京都府の南端、旧山田荘村(現相楽郡精華町)、普賢寺村(現在綴喜郡田辺町)さらにそれに接する奈良県の旧北倭村(現在生駒市)および平城村(奈良市)一帯の地域を洛南里親集落という。これらの地域は明治初期から大正にかけて、洛北里子の衰退とは逆に、洛北に代わって漸次発展してきた里親集落であり、綴喜郡田辺町西部一帯を普賢寺集落、相楽郡精華町一帯を山田荘集落と旧村名を附して呼んできたが、むしろ東畑集落と打田集落と名づけられてきた。

この両集落は、ともに明治以降、同様な経過をたどって発達形成されて来たのであって、児童福祉法施行以後は、そのまま登録里親となった。

本論考において打田集落の里親の中心として里親の開拓、指導に中心的役割をはたした、原大演師の里親活動を通してわが国の里親制度の歴史をふりかえってみたい。

原大演師は（明治四十二年〜昭和五十六年）京都府綴喜郡田辺町打田西明寺住職として（西山浄土宗）伝統の洛南里子村の中心として戦前、戦後を通じて里親活動に専念、特に京都府里親会長として地区のみでなく、京都府下、全国的にその生涯を里親活動に推進されたのである。

## 一、わが国の里親制度の発展

里子の由来は口碑伝説によれば、後一条天皇の時代（一〇〇〇年頃）に四条大納言藤原公任卿の息女が、京都の洛北岩倉の地に里子として預けられたのに始まるといわれる。また後三条天皇の皇女の難病が、同じく岩倉の地に里子として出されたことによって全治したと伝えられている。このように皇族公卿諸侯がその子弟を預けるとい貴族の風習から始まったもので、漸次武家商人一般庶民階級にもおよんだものとみられる。

里子の「里」は、いわゆる古唐制において百戸をもって

里とし、またわが国における大化改新の際、五〇戸を里とした行政区制によるものであることは容易に想像される。

特に「里子」は既に聖徳太子の時代にみられるといわれているが、また万葉集の山上憶良の「貧窮問答」にもみられ、源氏物語にもみられる。宮中に仕える要子（みこ）の生家も里といわれた。わが国では家はすべて宮中の真似であったから、一家の主人を宮中の者にたとえるなら、妻の生家も里となり、一家の主人を宮中の者のように、妻は崇め仕えねばならぬという考えであった。やがて里は、「人の住む地」あるいは「奉公人達の実家」を意味し、今日においても「里帰り」などと用いられている。

すなわちこのようにして里子とは、村里へ預けられた子を意味し、やがて他人に預けて養育を委託した子を広く里子と呼ぶようになった。「里子に出す」「乳付につける」などといわれ、「乳代」「乳子」とか「育て子」「預り子」などと呼ばれた地方もある。

これと類似のものに「貰い子制度」「養子制度」「名子制度」があった。

「養子」は同性相応の者から貰うのを原則とするのに対

して、「貰い子」は遠方から貰うのが原則である。家格の高い家や経済的に豊かな家が貰い子をする場合が多く、子どもは直接に村の先住者の生活を脅かさないから、むしろいい「村入り」の慣行は必要でなかったようである。

「名子」は幼少から大屋に引取られ、大屋の主婦が自ら乳を与えつつ養育した。幼少からの貰い子は手間取りの子よりはずっと地位が高かった。

貰い子制度と対象的なものに「育て子」制度があった。その熱心な提唱者に大原幽学がある。

幽学の教育の特徴は、すなわち「子を換えて教う」というのである。「子を育てるに食いたい飲みたいと思う根性ばかりを育てては、人となりて宣しき了簡の出る者にあらず、これ第一、子孫を亡ぼす者なればおそれ改めべし、一旦これに染まりたる子どもは、普き者にな難かるべし、依って右様に陥らざる様心がくべし」と述べている。すなわち七、八才十五、六才の子どもを対象とし、年限は一年ないし二年とし、一人の子どもがなるべく数軒の家で教育されるようにした。子どもを他家に預ける場合には扶養米を持参し、貧者の子女は富者の家に、富者の子は貧家に預け

るように計らった。そして「家内中の者、預りし子かわゆくなり、目をしのび落涙する程の情なければならぬこと」など十九条の「子ども仕込み心得」を掲げて指導した。

京都「五人組書」のなかに百姓の子が幼くして親に離れ、一人で生活できないときは、親類縁者、庄屋、長百姓、五人組が立合って、相談の上、田畠を預け、耕作させ、年貢は預った者が納め、地代で子弟を養育したと記されておる。

棄子は養育して貰えそうな家の門前に捨てる 경우가多かった。「五人組書」によれば、棄子は禁じられ、もし他者のものが捨てて行った場合、村中で育てて役所に届出ることになっていた。

このように他所の子を育てるという風習はかなり古くから行なわれていたことであるが、近世に至るまで、里子に関する特別の規定はみられない。しかし里子が行なわれる理由としては、

イ、母乳不足のため、ロ、迷信から、ハ、私生児の処理として、ニ、労働者の手足まといになるために、ホ、刑罰に伴って

などが考えられる。いずれにせよ里子制度は、へ、他人に養育を委託して、ト、そのためには一定の養育料が種々の名目のもとに里親へ支払われ、チ、預ける期間が定められている。などが特色である。

石井十次の岡山孤児院では、明治三八年（一九〇五）から乳児の里親委託をはじめており、また明治四〇年（一九〇七）頃、奈良県生駒郡北倭村の集団里親が、当時日露戦争直後で、戦後政策の一つとして里親なるものが、「集団保育よりも個人委託がよい」として、主として宗教家、篤志家の手によって始められた。特に京都府木津町正覚寺の井上隆森師が北倭村や隣接の京都府山田庄村、普賢寺村等を積極的に開拓した。その頃から京都府平安徳義会や平安養育院、大阪府の弘済会、博愛社などがこの地方に乳幼児の委託を開始するようになって、民間にも広く知られるようになった。しかし中間の仲介人が養育料の割を世話料（紹介手数料）として受取り、一部ではそれが嵩じて弊害が生じたこともあって、婦人団体が保護団体となって斡旋するようになった。大正八年（一九一九）から同十三年（一九二四）にかけては一〇〇名内外に達したといわれて

おり、その割合は、

授乳困難	三九%	片親	二三%	母接客業	十五%
隠し子	一〇%	その他	十三%		

となっており、養育料は明治四〇年頃は月四円で、当時米五斗が購入できたことを思えば相当の預り料と推定される。またこのほか年間数回実親の面会もあり、その都度、衣料、土産物が届けられた。

大正時代になると里子の健康診断も実施されるようになり、県当局も積極的指導を行ない、昭和一〇年頃（一九三五）には村も助成を行なうようになった。しかし、一方ではこれらの里子制度も種々の弊害をとめない、特に虐待の事例も多く、保護も不十分なため、各地に「里親取締規則」が生まれた。

大正一三年（一九二四）には京都府社会課が、「里子保護会」を結成、また阪神地区では、博愛社（養護施設）が奈良県のほか、和歌山県にも里子を委託し、和歌山県警察部もこれを援助した。他にも兵庫県の真生塾（養護施設）東京の市養育院、福田会（財団法人）が神奈川県等に委託を行っていた。その養育料は、月一五円であった。やが

て昭和七年（一九三二）救護法の施行によって、施設からの里子委託は禁止されることになった。しかし、施設の強い要望があって、東京市では助役通牒の便法によって事実上の委託は行なわれていた。このほか奈良、岡山、茨城、群馬、青森、秋田、島根などの各県においても施設からの里子委託は実際には行なわれていた。しかし、第二次大戦中は食糧事情もあって、この制度は全く終息してしまつた。

終戦後、戦災孤児や養育困難の貧困家庭が激増し、一方収容施設は、ほとんど収容能力を半減し、その復旧も容易ではなかった。昭和二年（一九四七）五月五日戦後第一回の児童福祉大会が開催された。そして占領軍当局の努力と相まって「里親制度」がとりあげられ、翌年一月児童福祉法が施行され、ここにまったく新しい制度として発足したのである。

里親制度は、前述のように他児養育の慣習がかなり古くあったにもかかわらず、児童保護という觀念の欠如から長い間制度として確立されることがなかった。児童福祉法が施行され、孤児、不遇児に対して、代替家庭を与え、健全

な家庭生活を通じて人格の完成をはかることとなったことは、児童福祉がようやく国家的関心を集めるに至った現われであり、また、世界の風潮である。

一九〇九年、アメリカのルーズベルト大統領がホワイトハウス会議において「家庭は文明所産のうち最も高い、最も美しいものである。精神と性格を形造る力である。児童は緊急やむを得ない理由がない限り、家庭生活から引き離してはならない」と宣言している。

わが国の児童福祉法の第一条に、「すべての国民は、児童の心身ともに健やかに生まれ、かつ育成されるよう努めなければならない」とし、児童憲章の二、において「すべての児童は家庭で正しい愛情と知識と技術をもって育てられ、家庭に恵まれない児童には、これにかわる環境が与えられる」としている。即ち、児童は家庭において養育されることが最も望ましいという思想は児童福祉法に里親制度が採用された理由である。

## 二、里親制度の現状

わが国においては現在に至るまで、里親制度は養子を求

める手段のように考えられていた。昭和二二年、児童福祉法の制定により、児童福祉行政の重要な施策として運用されることとなったが、以来里親委託児童数は、昭和三十三年をピークに減少の一路を辿っている。

「里親制度運用の低調化の要因が、わが国の国民性、家中心で家族の封鎖性が強く里子を受け入れる寛容性に乏しかった事にあるとはいえ、児童福祉施策に対する行政のあり方、並びに、社会福祉職の専門性についての反省にもあるように思われる。要養護児童の措置方法として措置機関である児童相談所のあり方が里親委託を消極的にしてきた事も事実である。」

里親委託が盛んであった時には、養護児童の生活保障をするために不幸な児童の養護を受託するという里親制度の本質を理解する里親が多かったが、このような養護里親が少なくなり自家繁栄のため養子縁組を希望する里親が多くなり養子縁組希望の里親にとって注文通りの里子が容易に見い出されないのです、養護児童は乳児院または養護施設に措置され、里親制度の運用はますます弱体化したのである。要養護児童総数の一〇％が里親委託、九〇％が施設養

護となっている。

しかしながら、このような状況のなかで、北海道（くろみ里親会では原則として養子縁組希望の里親は認めない方針を持ち、里親会と公的主管機関が有機的関係を持ち、共に児童福祉のための里親活動の展開に協働したこと）、宮城県（コミュニティにおける住民の協力態勢と児童相談所の措置機関としての優れた実績など）、埼玉県（里親制度施行以来、不幸な児童を家庭環境の中で育てるため努力してきた地域住民と児童福祉施策担当者の貢献大なること）、東京都（昭和四八年、里親制度の運用の根本的変革、Ⅰ、養育家庭制度の制定、Ⅱ、里親登録期間の制定）、神奈川県（里親集落の開拓、里親自身による地域ぐるみの活動）、神戸市（里親制度の本来的使命である社会的機能、「社会から子どもを預り社会へ帰す」を第一とする家庭養護寮、家庭養護促進協会が組織された事）は、独自の施策をもって里親制度の推進をはかっている。

### 三、原大演師の里親活動

京都府綴喜郡田辺町打田地区を中心とする里子村の歴史

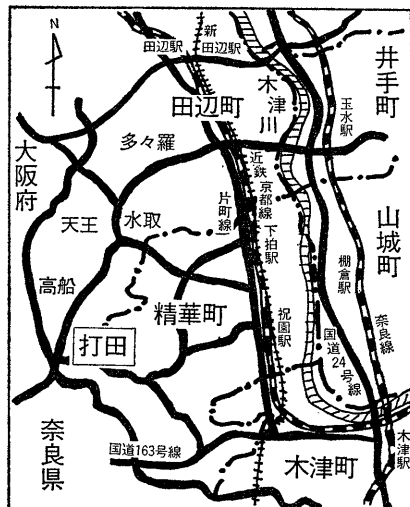
は奈良朝時代から、村の古老の伝え聞いたところによると、当時、三韓、唐から渡って来た異邦人が帰化し、日本女性との間に子どもをもうけたが、世間体をはばかり、奈良の都から近いこの山里に育ての親を求めたといわれる。

あるいはまた、同地区は都への裏街道筋になっていたため、大官人たちや隼人（はやと）が「落とし子」をかかえ、この地に住みついたり、預けたのが始まりともいわれるが、くわしい由来は定かではない。

普賢寺地区は近衛家の直属領地であった。米、イモ、タケノコ、良質の玉露の産地として知られ、自給自足の治外法権的な土地であったところから住民に余裕があり、そこから自然、里子を養うようになったのではないかとの説となえるも定かではない。

集団的な里親の起ったのは、明治三十八年頃浄土宗総本山知恩院が慈善事業に末寺を通じて里親開拓に乗り出し、京都府木津町正覚寺井上隆森師の里親開拓に始まるといわれる。里親が盛んであった昭和二十五年から昭和三十六、七年頃までの約十年間に、かつての普賢寺村（昭和三十六年田辺町合併）は、里親愛育会の中心となった打田地区を

はじめ、奈良県沿いの高船、天王、水取、多々羅五地区の里子村で八十八人の里子を預かり、特に打田地区においては、里子を預からぬ家は一軒もなかったといわれる。



里子村は、前述の明治期から約七十年間に四〇〇人ともいわれる里子を養育、社会に送り出したといわれる。

この里子村の中心的存在であったのが原大演師である。師は三十四才の時、打田地区の西山浄土宗光明寺派の西明寺に晋山以来戦前、戦後夫妻そろって里子・里親への説得行脚を行い、自房において生涯十八名の里子を養育されて

いる。師は地区の里親愛育会々長、京都府里親会々長、近畿地区里親会連絡協議会長、全国里親連合会副会長を歴任、里親制度の重鎮であった。

### 原大演師略歴

明治四拾貳年五月十六日、大分県速見郡南由布村大字川南参拾八番地で出生（父原半次郎母エツの長男）昭和二年五月大演と改名、（十八才にて僧籍のため）旧名喜代市。

昭和五年三月二十五日浄土宗西山派立仏教専門学校（現西山短期大学の前身）卒業、同年四月万福寺（大阪市天王寺区下寺町二丁目）隨身、昭和十年十二月妻律子と結婚、昭和十五年七月西明寺住職（京都府綴喜郡田辺町字打田、西山浄土宗、粟生光明寺派）

昭和二十年五月 舞鶴海兵団入隊（臨時召集）

昭和二十年九月 召集解除

昭和二十一年六月 京都府綴喜郡普賢寺村書記補任命

昭和二十六年、町村合併により、京都府綴喜郡田辺町書記任命

昭和四三年四月退職（二十二年勤続）

昭和二十三年四月一日より昭和五六年五月二日まで、児童

福祉法に基づく里親（三十三年）

昭和五十六年五月二日遷化

### 原大演師表彰歴

昭和二十六年六月 西山浄土宗管長 人命救助

昭和二十六年七月 京都府公安委員会 人命救助

昭和二十七年五月 厚生大臣 児童福祉事業貢献（里子の保護事業）

昭和三十七年十月 全国里親連合会長 里親制度進展のため

昭和三十九年五月 京都府綴喜郡社会福祉協議会長 永年社会福祉貢献のため

昭和三十九年十一月 京都府社会福祉協議会長 永年社会福祉事業従事、事業振興（里親）貢献のため

昭和四十六年九月 近畿地区里親会連絡協議会長 初代会長として永年里親里子の福祉に貢献のため

### 原大演師功績調書

本籍 京都府綴喜郡田辺町字打田小字宮本三番地  
現住所 京都府綴喜郡田辺町字打田小字宮本三番地



氏名 原 大演<sup>はら だえん</sup>

(旧氏名 原 喜代市)

明治四十二年五月十六日生

## 一、性行

人格高潔、清廉謹直にして深い愛情と誠意は、町住民の福祉向上、とりわけ児童福祉の向上に大きな役割りを果たし、住域住民から非常に厚い信望が寄せられていました。

## 二、事項

昭和二十三年の児童福祉法の施行にともない、当時の混乱した世相、戦塵もおさまらぬ暮しの中で、戦災孤児等の薄幸の児童たちの里親としていち早く活躍され、以来今まで、慈愛あふれる愛情をそそがれ、その児童の数は八十名を越えるに至っております。

家庭に恵まれない児童に親としての愛情と誠意をもって養育にあたり、その児童の成長に必要な知識と技術の向上につとめ、又、社会的独立を助け、立派な社会人として巣立たせ、その児童をめぐる社会環境の改善につとめてこられました。この三十数年間は地域住民はもとより、全町民がすぐれた福祉事業の実践者として尊敬し、感謝して来た

ところであります。

又、全国里親会の理事をはじめ永年にわたって、近畿地区里親連絡協議会長、京都府里親会連合会長を務められ、里親制度及び里親組織の確立、向上に尽された功績は誠に大きく、今日まで田辺町の地域福祉の真の指導者として、全町民から崇敬されてまいりました。

昭和五十六年五月九日

京都府綴喜郡田辺町長 原田喜代次

## 参考文献

- 三吉明編著『里親の研究』日本児童福祉協会 昭和三十八年
- 松本武子編著『里親制度』相川書房 昭和五十二年
- 松本武子著『児童相談所と里親制度』相川書房 昭和五十五年
- 『児童問題講座』③「児童の権利」佐藤進編 ミネルヴァ書房 昭和五十一年
- 『児童問題講座』⑥「児童養護問題」浦辺史編 ミネルヴァ書房 昭和五十三年
- 小笠原平八郎著『里親保護』川島書房 昭和四十二年
- 京都府綴喜郡田辺町役場資料